

ご購入者様特典2

～特別レポート～

《実録》

追いかけられたオンナたち



このはなさくや 著

～ はじめに ～

この特別レポートは、「追いかけるオンナ 101 のオキテ」ご購入者様限定のプレゼントです。

本編では、好きな男性を追いかけてないがしろにされるオンナを脱却して、男性に追いかけるオンナに変身する為の 101 のオキテをご披露しました。

この特別レポートでは、
かつて、好きな男性を追いかけてないがしろにされまくっていた女性が、
自分の行動を変えることによって一発逆転パンチ、
追いかけるオンナに大変身を遂げた事例をあげています。

この事例に載っている三人の女性たちは、全員わたしの友人たちです。

彼女たちは特別美人でも家柄がよかったわけでも特別な才能があったわけではありません。
あなたと同じく、好きな人が自分のことをどう思っているかで一喜一憂してしまう、
ごくごくフツウの女性たちだったのです。

そして好きな男性に「重い」と言われ、ないがしろにされるという経験もしています。

でも、最終的に、考え方を換え、行動を変えることで、
彼女たちは自分の運命を変えてきました。

彼女たちに彼女たちが体験したことを掲載していいか確認を取ったところ、
「一人でも多くの女性たちにし幸せをつかんでほしいから。」と、
三人ともこころよく承諾してくれました！
(ただし、彼女たちのプライバシーを保護する為に、すべて仮名にしてあります。)

彼女たちの事例を読んでいただくことで、一人でも多くの女性に、
女性としての幸せを手にするヒントをつかんでいただけたらと願っています。

本書の著作権は、このはなさくや にあります。

【第一話】マサヨさん40歳（現在ハワイ在住）のケース

トップバッターは、海洋学者のダンナ様の仕事の都合で、現在ハワイで暮らしているマサヨさんです。

マサヨさんが現在のご主人、ユタカさんと出会ったのは、ロンドンの大学院に留学していた26歳の頃で、二人はフラットのシェアメイト同士でした。

（ちなみにそのフラットは、マサヨさんのお父さんが所有する物件で、お父さんは東京にいるために事実上マサヨさんがそのフラットを管理していました。）

東京の山の手出身のおとなしいマサヨさんは、同じ日本人でありながら、イギリス人独特の辛辣なユーモアにもめげずに対等に切り返す、関西出身のユタカさんがまぶしかったようです。

なれない異国の地で勉学に励む二人、すぐに意気投合し、週末も一緒に出かけるようになり、まるで恋人同士のようなつきあいに発展するのにも、さほど時間はかかりませんでした。

問題は、ココ。「まるで恋人同士のような」というところなのです。

そう。ユタカさんからの「ボくらつきあわへん？」という一言がないうちに、マサヨさんは彼と肉体関係を持ってしまったのです。

そして、マサヨさんは長女、ユタカさんは末っ子。マサヨさんはユタカさんの世話をまるで奥さんのように甲斐甲斐しく焼くようになってしまいました。

同じフラットのほかのシェアメイトたちから冷やかされ、マサヨさんはまるで彼の奥さんになったような気分で、「新婚気分」を味わっていたのですが、一方のユタカさんは、だんだんそれを重たく感じるようになってきていたのです。

「でも、オレら、ただのトモダチやん？」

この言葉で、ユタカさんはマサヨさんが「女房ヅラ」しないように牽制するようになったのでした。

ユタカさんの口から「ただのトモダチ」発言が出るたびに、その言葉は、マサヨさんの胸にグサッ、グサッと刺さり続けたのですが、マサヨさんは、ユタカさんがいつかは振り向いてくれるかもしれないという一縷の望みをかけて、ユタカさんのそばを離れられずにいたのでした。

そして、ユタカさんが素敵な女の子に出会った、彼女の家にホームパーティーに呼ばれたと興奮してしゃべるのを、**本当はイヤなのにそんな気持ちなどみじんもない平気なふりをして聞きつけ**、そればかりでなく、

「お呼ばれしたんだったら、手ぶらでいっちゃ失礼よ。これ持っていったら？」と、

なんと、**手づくりのケーキまで焼いてお土産に持たせるということまでしたようです。**

(これはあとでマサヨさん本人も、「わたしもあの頃は“イイヒト”やめらんなかったのよね(笑)」と述懐しています。)

ユタカさんは「オレらトモダチやん？」を武器に、マサヨさんが文句を言う立場にないのを良いことに、次々と学内にいる好みの女の子を追いかけては、マサヨさんにイチイチ報告し、

「なあなあ、女の子ってどういうことしてあげたら喜ぶんやろ？」

と悪びれもせず、マサヨさんに相談までする始末。

とにかく、言いたい放題やりたい放題。

マサヨさんは、それでも、**いつか彼は、自分の愛をわかってくれるはず、彼を一番理解しているのは自分だってわかってくれるはずと、じっと我慢していました。**

ですが、さすがのマサヨさんも、ある日とうとう観念しなければならない日がやってきました。

ユタカさんが、研究のために、イギリスからも日本からもはるか遠い、インドに1年間行くことになってしまったのです。

出発の前の晩、マサヨさんは彼のために料理を作って、支度を手伝って、そして最後の晩だからというので、セックスまでしちゃうんですね。

一晩明けて、いざ出発という時になって、彼女としては、夫を見送る妻のような気分で、「必ず帰ってくるから、待ってろよ。」という彼の言葉を期待していたのですが、彼の口から出てきた言葉は...

「オレ、インドでの研究が終わっても、ココに戻ってくるかどうかわからへん。オマエも、オレのこと待たんで、さっさとカレシつくれや。」

茫然自失となったマサヨさんをしり目に、彼はトランクをひょいっともって、スタスタと出て行ってしまいました...

ユタカさんがインドに旅立ってから、マサヨさんは腑抜けのようになってしまったのですが、ユタカさんからは連絡ひとつなくナシのつづて。学内の共通の友人たちのところには、ユタカさんからメールがときどきとどいているようですが、友人たちに聞いても、マサヨさんのことを尋ねる言葉はとくに書いていないようで、そこでまたマサヨさんはショックを受けます。

「ユタカは、もうわたしのことを、記憶から消し去りたいんだ....」

涙があふれてとまらなくなり、フラットの自室に帰ってへたへたとへたり込み、数日間は食欲もなく、幽霊のような状態でした。

ですが、最後にマサヨさんもハラをくくります。

「もう、ユタカのことには忘れよう！」

その日からマサヨさんは、半強制的にユタカさんのことを考えないように、自分をいそがしくしはじめます。

ユタカさんがいたころは、料理をするのもユタカさんを喜ばすため、美味しいものを見つけてもユタカさんと一緒に食べるため、美容室に行って髪の毛を切ったりパーマをかけたり、ネイリストのところやマッサージに行くのも、ジムに通うのも、なにかもがすべて、ユタカさんに認めてもらうためだったのですが、それらをすべて「自分自身を喜ばせるため」に切り替えます。

学内の他の男子学生からデートに誘われても、それまではつきあってもいないのにユタカさんに操を立てて、一切他の人とデートなんかしなかったマサヨさんでしたが、つとめていろんな男性と、まずは友達になるところから始めました。

積極的な変貌ぶりです。

そうこうしているうちにマサヨさん自身も、ユタカさんなしでもそれなりに楽しく暮らしていけるようになり...

な・ん・と！！！！

ほとんど思い出さなくなってしまったのです！！！！

そうこうしているうちに、ユタカさんがインドに行ってから1年が過ぎました。以前のマサヨさんだったら、指折り数えて待っていたでしょうが、今のマサヨさんは、ユタカさんがインドに行ってから1年が過ぎたことすらも思い出さなくなっていました。

とはいえ、ユタカさんを恨んでいるわけでも何でもなく、ユタカさんなしでも自分の時間を充実させることができるようになって毎日を楽しく暮らしているうちに、ユタカさんのことも遠い思い出になって、ユタカさんのことを考えても、胸がキューっと締め付けられるようなあの感覚はなく、仲の良い兄か弟のことを考えるような、穏やかなものに変わっていったのでした。

そんなある日。電話がかかってきました。

「マサヨ？オレや、オレ。」

「はい？」

「オレや。ユタカや。今、ヒースローや。インドから帰ってきたで〜。」

「わあ、ユタカさん！日本じゃなくてロンドンに戻ってきたの？」

「そうや。まだガッコあるしな。」

「ところで、オレ、今からそっち行くから。」

「そっちって、ウチのフラット？」

「そうや？まずいんか？」

「だって、あなたが住んでた部屋には他の留学生が住んでるし、今空いてる部屋ないわよ？」

「あ〜、そしたらしゃ〜ないな〜、オマエの部屋、泊めてや。」

以前のマサヨさんだったら、こういうときは、嬉々として、一も二もなく承諾したでしょう。

ところが...

「それは困るな～。悪いんだけど、ホテル取るか、大学の学生寮の空き室あたってくれないかな？」

そう、マサヨさんは甘えてくる彼をぴしゃりとはねつけたのです！

マサヨさんの変貌ぶりにユタカさんはすぐ気が付きました。

もう、マサヨさんは、以前のような、自分の言いなりで、なんでも許してくれるマサヨさんではなくなったことに。

結局ユタカさんは、大学の学生寮に住むことになり、マサヨさんのところには「友人として」ときどき訪ねてくるようになりました。

しかも、突然ふらりとやってくるのではなく、前もってきちんとアポイントを取って。ずいぶんと紳士的になったものです。

というのも、マサヨさんが許さなかったからです。

以前のマサヨさんなら、彼に厳しくしようものなら、彼を失ってしまうとビクビクして、彼のいいなりになっていたでしょう。

ユタカさんのマサヨさんを見る目はすっかり変わりました。

そして、驚いたことに、ユタカさんは、何かと理由をつけてはマサヨさんを訪ねてくるようになりました。

もちろんマサヨさんはユタカさんを「友人として」歓迎しました。

さて、夏のある日曜日、フラットの外壁のペンキ塗りをするというので、ユタカさんもマサヨさんを手伝いにきました。

そして楽しくペンキ塗りをしていたところ...

「アイタタタタ.... !!!」

「ど、どないしたん??！」

「腰、腰が... !!!！」

マサヨさん、ぎっくり腰になってしまったのです。

あまりの激痛にひとりでは歩けなくなってしまったマサヨさんをサポートする為に、ユタカさんはしばらくの間、臨時でフラットの空き室に寝泊まりすることになりました。

甲斐甲斐しくマサヨさんの面倒をみているうちに、ユタカさんの胸の内に、ある思いがこみあげてきたのです。

「マサヨは、オレが守ってやらな。」

マサヨさんのぎっくり腰がよくなって、一人で身の回りのことができるようになり、ユタカさんが学生寮に戻る日。

ユタカさんはマサヨさんにプロポーズをしたのです。

「マサヨ、オレのヨメにならんか？」

「はあ？」

「マサヨはオレが守る。」

「いや、守るって言われても...」

「この通りや！オレのヨメさんになってください！」

ユタカさん、なんと土下座をしてしまったのです！！！！

「ど、土下座までしなくても...」

「オレじゃアカンか？」

「いや、アカンとか、そういうわけでもないけど…」

というわけで、マサヨさんがユタカさんを好きになって足掛け5年。
マサヨさんの30歳の誕生日に、日本に一時帰国して、両家のご両親やご親族が見守る中、
神前結婚式を挙げたのでした。

その後二人は、ユタカさんの海洋学者としての研究のために、ハワイに引っ越し、お子さんはまだいないものの、10年たっても幸せに仲良く暮らしています。

～第一話終了～

【第二話】 智美さん 49 歳（現在スウェーデン在住）のケース

二番目は、福祉の勉強をしにスウェーデンに留学したことがきっかけで現在のご主人に出会い、紆余曲折の果てに国際結婚をして、現在は、ご本人である智美さん、ご主人、ご主人の前妻との間に出来たお子さん二人、智美さんとご主人の間に出来た双子のお子さんと、全部で6人のパッチワークファミリー（智美さんの造語です）のお母さんとして、首都ストックホルムの郊外で、笑顔いっぱい暮らしています。

智美さんはもともと日本で介護士として仕事をしており、現在のご主人ヘンリックに出会ったのは、智美さんが福祉の勉強をするために、スウェーデンに留学した、34歳のときでした。

ヘンリックは、ハンナという智美さんの友だちの従弟で、二人はハンナの家でのホームパーティーで出会いました。

底抜けに明るくておしゃべりな智美さんと、北欧の男性らしく寡黙なヘンリック。太陽と月のように真逆な二人はすぐ惹かれあい、デートするようになりました。

ヘンリックには離婚歴があり、前妻との間にできた子供二人を引き取って育てていました。離婚の理由は、前妻の浮気です。

子供たちはいったんは前妻が引き取って育てていましたが、彼女が次から次へとボーイフレンドを変えては、子供たちを置いて遊びに出かけ、明け方まで帰ってこない、ネグレクト状態だったために、ヘンリックが引き取って育てていたのです。

寡黙でさびしげな表情を見せるヘンリックに、智美さんはどんどん夢中になっていきました。

「傷ついた彼のこころを癒やしてあげたい...」

智美さんは甲斐甲斐しくヘンリックに尽くし始めました。

ヘンリックの家に出かけてはまるで奥さんのように料理を作ったり掃除や洗濯をしたり、子供たちが学校から帰ってくる時間に合わせてお菓子を焼いたり...

陽気で優しい智美さんにヘンリックの子供たちもすぐになつき、智美さんも子供たちがかわいくて仕方がなく、ハンナからも「あら～、この子たちがこんなになついちゃうなんて

ねえ～… あなたたちお似合いだから結婚しちゃえばいいのに。」とけしかけられ、智美さんもそれを期待していたのですが…

智美さんの二年間の留学期間が終わりに近づいても、ヘンリックからは何も言ってきません。

不安になった智美さんは、ヘンリックに、

「わたし、もうすぐ日本に帰らなければいけないから、あなたとのこと、はっきりさせたいの。**わたしはあなたの何なの？**」

と詰め寄ってしまいました。

「ボクはキミのこと好きだよ。大切なガールフレンドだと思っている。」

「大切なガールフレンドって… それだけ??！」

「それだけって、それだけじゃ、ダメなの？」

「それだけじゃダメなのって…。」

智美さんは言葉が続けられず、**ヘンリックの前でボロボロ大泣きしてしまいました。**

「悲しませてごめん。でも智美、わかってほしい。今のボクにはここまでしか言えないんだ。」

「ここまでしか言えないって…。」

「決められないんだよ…。」

結局ヘンリックの口からハッキリした答えがもらえないまま、智美さんは日本に帰ってくることになりました。

その後も、仕事を続けながら、お金をためては夏休みや冬のクリスマスシーズンに、智美さんが日本からのお土産をたくさん持って、ヘンリックや子供たちに会いに行くという生活がしばらく続きました。

智美さんは、ヘンリックと離れてさみしく感じはしたものの、いつかは彼も決心してくれるはず、きっと一緒になれるはずという一縷の望みを持ちながら暮らしていたのでした。

そんな生活が3年ほどつづいた秋のある日、そろそろクリスマス休暇にスウェーデンに行くための航空チケットを予約しようかなと思ったころ、ヘンリックから手紙が届いたのです。

「今年のクリスマスはスウェーデンに会いに来ないでほしい。僕たちはずっとこのままで

いるわけにはいかない。僕はキミを幸せにしてあげられないから。僕のことはもう忘れてくれ。キミはキミの人生を歩んで、幸せになってほしい。僕の子供たちにやさしくしてくれてありがとう。さようなら。」

あまりに突然、一方的に別れを告げられ、半狂乱になった智美さんは、ヘンリックに他の恋人が出来たのではと思い、ハンナに電話をかけて相談したりもしたのですが、ハンナによると、ヘンリックには特に別の恋人ができたわけでもなさそうだったということだったのです。

どうしても納得がいかない智美さんは**彼に何度も電話をしたのですが**、おそらく日本からの電話だとナンバーディスプレイに出るからでしょう、彼は決して電話を取ってくれませんでしたし、たまたま子供たちが電話に出たときに、「**パパにトモミから電話があったと伝えてね。**」と伝言しても、彼からのコールバックが来ることはありませんでした。**彼に何通も何通も手紙を出しても**、彼から返事が来ることはありませんでした。**せめてクリスマスに、子供たちが楽しみにしていた日本のお土産をと航空便で送ったのですが**、子供たちからお礼をしたためたクリスマスカードが届いただけで、彼からは何もありませんでした。

「彼は、本当に、もう、わたしのことを、完全に記憶から消し去りたいんだ...」

クリスマスイブにふらりと入った東京の街角の教会のミサに参加している間、智美さんはずっと泣いていました。

ヘンリックと出会って5年。智美さんは、39歳になっていました。

クリスマスの後、フラフラになりながらも気力で年末の業務をこなし、お正月休みは実家で過ごすために九州に帰ったのです。

九州の実家では、お父さん、お母さん、そしてお兄さん夫婦が温かく迎えてくれました。

実の姉妹のように仲良くしていた兄嫁の和子さんが、智美さんの様子を見て、温泉に連れ出してくれました。

露天風呂から見える由布岳を眺めながら智美さんの身に起きた一部始終を聞いたあと、和子さんは、智美さんにおだやかに語りかけました。

「トモちゃんさ、彼のことを本当に愛してるのね。」
「もちろん。」
「そっか。そうだよな。」
「うん。」
「トモちゃんは、彼の望むことなら何でもかなえてあげたいって思うよね？」
「もちろん。」
「そしたらさ、彼さ、トモちゃんに幸せになってほしいんだよね。」
「でもカズちゃん、わたし、彼なしで幸せになんてなれない…」
「そっか。」
「そう…。」
「それと、トモちゃん、彼に幸せになってほしいって願ってる？」
「うん、もちろん。」
「トモちゃんなしでも彼が幸せになること、トモちゃん、願ってあげられる？」

愛する彼にはもちろん幸せになってほしい。
でも、彼を幸せにするのは、自分でありたいのに… !

和子さんのひとこと、
「トモちゃんなしでも彼が幸せになること、トモちゃん、願ってあげられる？」
という言葉は、智美さんの胸にずしりと響きました。

そして、智美さんは、ことあるごとに、何度も何度も、和子さんのその言葉を思い返すのでした。寄せては返す波のように。

比較的ポジティブな気分の日には、和子さんの言うように、「たとえ自分抜きであっても彼の幸せを願える自分になりたい。」と思える日もありましたが、その一方、「わたし抜きで彼が幸せになるってどういうこと？わたしは彼と一緒に幸せになりたかったのに。わたしの人生って一体何だったの??！」と、仕事中でもふいに感情がこみあげてきて、トイレに駆け込んで人知れず号泣したり…
そんな日を交互に繰り返してはいましたが、時間がたつにつれて、そのような激しい激情が襲ってくる頻度も少なくなってきました。

それからおよそ1年ちょっとすぎたころの、早春にしてはポカポカ陽気のある日。まだひんやりする風に吹かれながら、スウェーデンでの暮らし、そしてヘンリックのことを思い出していました。

「ヘンリックは今、どうしてるかなあ... 幸せでいるだろうか？彼、人見知りで陰気臭いところあるからなあ...」

そして、ふいに、なぜか、こんな言葉が彼女の口をついて出ていたのです。

**「神様、どうか、ヘンリックが幸せでありますように。
たとえこのまま一生会うことがなかったとしても、彼が幸せでありますように。
そして、わたしも幸せに生きて行くことを選択します。」**

その瞬間、智美さんは、こころの中で、なにかカギのようなものが「カチッ！」と音を立てたように感じたのです。

「ふう... “執着を手放す” って、こういうのをいうのかしら??！」

不思議な気持ちを味わいながら、家に帰ったとたん、電話が鳴りました。

「はい、鈴木です。」

「トモミ？僕だよ。ヘンリックだよ。」

茫然自失となって応えられずにいる智美さんに、電話の向こうからヘンリックが早口でまくしたてるのです。

「キミのことを忘れようと何度も何度もトライした。でもできなかった。一年たってようやくわかったんだ。僕にはやっぱりキミが必要だ。結婚しよう、トモミ。」

そこから話はトントン拍子に進み、それから2カ月後のイースター休暇に、彼が日本にやってきて、智美さんと一緒に、九州の実家のご両親を訪ね、カチンコチンになりながら、「トモミサンヲ、ボクニ、クダサイ！」となれない正座をして深々と頭を下げたのです。

台所で一緒に夕飯の支度をしながら、兄嫁の和子さんが、ニッと笑って、

「トモちゃん、やったね♪」とVサインを送ってきたのは言うまでもありません。

その後、大至急親族を呼び集めて身内だけのささやかな結婚式を挙げ、東京に戻って超特急で結婚のための諸手続きを進め、なつかしいスウェーデンの地をふたたび踏んだのは、白夜の季節でした。

その後、ヘンリックと智美さんの間には、双子の赤ちゃんが生まれ、彼の前妻のお子さん二人もいいお兄ちゃん・おねえちゃんぶりを発揮して赤ちゃんたちをかわいがってくれ、総勢6人の幸せなパッチワークファミリーとして仲良く暮らしています。

～第二話終了～

【第三話】ミカさん 47 歳（現在オーストラリア在住）のケース

三番目のケースは、ミカさんは現在 47 歳。現在、オーストラリアのゴールドコーストで、美術関連の翻訳の仕事をして働いています。

ご主人のスティーブは 7 歳年下のハンサムなオージー男性です。

二人は、ミカさんが美術ジャーナリズムの勉強をするためにフランスに留学した、41 歳の時に知り合いました。

出会いの場は、二人の共通の友人の家で催されたホームパーティーの場です。

まだフランスに来て間もない時期で、友人たちの早口のフランス語での会話についていけずに、部屋のすみっこでポツンとしていたミカさんに、スティーブが話しかけてきたのです。

「やあ。あんまり盛り上がってなさそうだね（笑）」

「ええ。わたし、フランス語あまりわからないから。」

「あ、そう。じゃあ英語ならわかるかな？ボク、オーストラリア人なんだ。」

「英語もあまり上手じゃないけど、フランス語よりは...」

「うん、キミの英語、イケてるよ！ここじゃ、ガイジンはボくらだけみたいだね（笑）」

ゴールドコースト出身だという陽気なスティーブとミカさんはたちまち仲良くなりました。

パーティーが終わって、電話番号を交換した翌日から、スティーブから毎日のように電話がかかってくるようになり、しばらくして二人は二人っきりでデートをするようになりました。

ゴールドコーストの太陽そのものようなくったくのないスティーブの明るい笑顔に、ミカさんのころはほぐれて行くようでした。

というのも、ミカさんは過去に男女関係で地獄のような思いを味わってきたからです。

ミカさんは戸籍上こそまだ未婚でしたが、地元の国立大学を卒業して就職する為に東京に出てきた 22 歳のころから 5 年間、27 歳になるまで生活を共にした、内縁の夫がいました。その男性は、ミカさんより 22 歳年上の 44 歳。出身もミカさんと同じ北陸の出身でした。彼とは仕事帰りにたまたま同僚と遊びに行った六本木のクラブで出会ったのですが、ミカさんが同郷出身だと知って、あたたかい言葉をかけてくれた彼に、ミカさんはすっかりころを許し、それからすぐ二人は付き合いだし、**付き合いだしてからまだ二週間しかた**

ないうちに同棲を始めてしまったのです。

ミカさんのご両親はミカさんがまだ赤ちゃんのころに離婚しており、ミカさんはお父さんの顔を知りません。22歳年上の彼に、ミカさんはお父さんを重ねていたのかもしれませんが。

オクテだったミカさんにとって、彼はなにもかもが初めての相手でした。つきあったのも彼が初めてなら、キスをしたのも、セックスをしたのも彼が初めて。

彼の手で少女から大人の女に変えられていくのが、ミカさん自身うれしくてたまらなかったようです。

そうこうしているうちに、ミカさんの妊娠が発覚しました。23歳の誕生日の直前、つきあいはじめてまだ半年もたないうちでした。ミカさんは愛する人の子供を身ごもったことが嬉しくてたまらず、彼との結婚を望みましたが、彼はミカさんとは結婚できないと告げました。

彼には別居中の妻がいたのです。

彼からは、妊娠した子供は墮ろすように言われ、ミカさんは泣く泣く中絶手術を受けました。

そんなことがありながらも、ミカさんは惚れた弱みで彼から離れることができず、そのままずるずると5年間同棲してしまいました。

そんなある日、彼の口から、彼の奥さんとの離婚が正式に成立したということを知りました。ミカさんは、これですべて彼と晴れて夫婦になれると天にも舞い上がる気持ちでしたが、喜びもつかの間、彼から別れてほしいと言われてしまったのです。

なんと、ミカさんが知らない間に、彼はミカさんの友人直美さんと付き合い始めていたのです。

ミカさんは、彼とのことで不安になると、直美さんに電話しては逐一相談しましたし、彼の気持ちがわからないからということで、直美さん頼みこんでに彼に会ってもらって、彼の本心を聞き出してもらうということまでしてもらってしまっていたのです。

そういったことを繰り返しているうちに、彼と直美さんは肉体関係を持つようになり、ミカさんに内緒で付き合い始め、彼は直美さんに本気でのめり込んでしまい、直美さんと結婚したいがために、それまで面倒くさがってノラリクラリと避けてきた、奥さんとの離婚

手続きを一気に進めたのでした。

ミカさんが何度泣いて頼んでも「妻が離婚に応じてくれない。」の一点張りでノラリクラリトかわされ続けてきたのに。

「わたしのためには、彼は本気では動いてはくれなかったけど、直美のためだったら、彼、あんなにあっさり動くんだ... やっぱりわたしじゃ駄目なんだ...」

ミカさんは号泣して彼をなじりましたが、彼は石のように動じることはありませんでした。ミカさんが彼の子供を妊娠していることに気がついたのは、ミカさんが彼との別れを受け入れ、同棲を解消して2ヵ月がたったころでした。

別れたあと、彼とは絶対に連絡はとらないと決めていたために、彼の新しい連絡先も一切もらわなかったこともあり、彼に子供ができたことは伝えることはしませんでした。

お腹の子を堕ろそうかどうか悩みに悩んだ末、5年前の22歳の時に初めて妊娠した赤ちゃんを堕ろしたときの悲しみはもう味わいたくないと、ミカさんは、一人で赤ちゃんを産んで一人で育てることに決めました。

彼女はシングルマザーとしての新しい人生を歩んでいく決意をしたのです。

27歳の時のことでした。

一年後、28歳でミカさんはかわいらしい女の赤ちゃんを出産しました。

誰からも愛される子に育ててほしいという願いを込めて、「愛ちゃん」と名付けました。

その後、ミカさんは、おとなりの埼玉県に住んでいた4歳年上のお姉さん夫婦の助けをうけながら、子育てをしながらアート関連の出版社で働き始めました。

誰とも付き合わず、同性の友人たちとも一切遊びあるくこともせず、無我夢中で自宅と保育園と会社の往復を続ける日々を送り続けて10年がすぎたころ。

美術関連のジャーナリズムの勉強をしにパリに留学したいと思うようになりました。

愛ちゃんが中学校に上がったのを見届けて、ミカさんはお姉さん夫婦に娘さんをあずけ、パリにやってきました。

ミカさん41歳の時のことでした。

そして、前出の、オーストラリア人男性スティーブに出会ったわけです。

シニカルなフランス人男性が多い中、陽気でフレンドリーで人当たりのいいスティーブは、

フランス人女性からもとても人気があり、いつも2～3人の女性とデートしている状態でしたが、ミカさんは、男性に懲りていたこともあり、また、自分がフランスに来たのはあくまでも勉強のためであり遊びやパートナー探しのためではないと自分に言い聞かせていたため、**彼にはまったく興味を示しませんでした。**

北欧出身の祖父母譲りの長身と、プラチナブロンドの髪と青い目を持つハンサムなスティーブ。

出会う女性出会う女性が彼を憧れのまなざしで見つめ、チヤホヤすることに慣れていた彼にとって、**自分に興味を示さないミカさんの存在はかなり新鮮でした。**

その彼にとって、ミカさんを振り向かせることが新しい目標となるのに、さほど時間はかかりませんでした。彼のヴァイキング魂に火がついたのです（笑）

またミカさんの方も、子供のように素直で、ひょうきんで憎めないところのある彼が、何度もめげずにアタックしてくるその情熱を憎からず思うようになり、**「わたしたち、まだお互いのことをよく知らないじゃない？だからまずは友達づきあいからね。」**といったぐあい
で、**まずはウィークデーのランチデートから**はじめることにOKしました。

これもスティーブにとっては衝撃でした。誰もがみんなスティーブの彼女になりがたるのに、ミカさんときたら、「お友達からはじめましょう」と切り返してきたのですから。

スティーブはミカさんにぞっこんだったので、不承不承お友達から始めました。3ヶ月たって、スティーブは無事ミカさんのボーイフレンドに昇格します。

完全にミカさんのペースです。

スティーブはもともとマメな方ではなかったのですが、なぜかミカさんにはマメでした。**ミカさんが、もともとはあまりマメではないスティーブをさらに上回るくらい、スティーブにかまわないで放置しておいたからです。**

これは計算ずくでわざとそうしていたのか、あるいはスティーブから熱烈に追いかけられていた自信がミカさんに自然にそうふるまわせたのかは今でもナゾです。

スティーブはといえば、今まで付き合いしてきたガールフレンドたちに、**マメではないのを責められたり、ガールフレンドの方がスティーブをあまりにも好きになりすぎて、スティーブに毎日電話やメールが欲しいと要求するようになって、きゅうくつになって別れてしまうことが多かった**のでした。

ミカさんは、自分がパリに来た目的はあくまでも勉強であること、そして電話もメールも苦手だと伝え、特に電話については、用があるときのみ、出来れば月に2～3回程度におさえてほしいと伝えていたのです。

それにもかかわらず、スティーブからは、週に2～3回は電話がかかってきて、そのたびにミカさんは、「**今忙しいから。」と理由をつけて、恋人同士にありがちな、ベッタリネットリの長電話はしないように回避していた**のです。

スティーブからの電話はたいてい「**今度いつ会える？**」というような内容でしたが、それに対しても、「**時間があるときにわたしから連絡するから。**」とかわしていたのです。

このミカさんの態度がスティーブの男性としての狩猟本能に火を付けたらしく、今までのガールフレンドにはちっともマメではなく、追いかられる一方だった彼が、いつのまにかミカさんに対しては「**追いかけるオトコ**」になっていました。

一方のミカさんも、20代のころつきあっていたあの男性に対しては、完全に「**追いかけるオンナ**」だったのに対し、**スティーブに対しては、完全に「追いかられるオンナ」のポジションをとっていたのです。**

スティーブは今までのガールフレンドには、気がのらなくなると「**寝不足で調子悪いから。**」などといって約束をドタキャンをしたりしたこともあったのですが、ミカさんに対しては、ミカさんが断りようがないように、綿密に作戦を練って誘ってきたのです。

たとえば...

「ねえ、ミカ、次の週末、泊まりがけで海まで行こうよ。」

「あ～ゴメン。日曜日試験があるからムリ。」

「え？何時にどこで？」

「〇時に××区の△△ホールで。」

「それだったら、△時発の特急列車に乗れば試験には間に合うよ。大丈夫だよ。」

「前日勉強したいからムリ。」

「海辺で勉強すればいいじゃない。その方がリフレッシュしてはかどるよ？」

こんな風に、スティーブはミカさんの逃げ道をどんどんふさいでいったのです。

そうこうしているうちに、スティーブの方が熱心になってしまい、同棲を持ちかけられ、「**わたしは日本人だから、オールドファッションなの。同棲はしないわ。**」と回避しようとしたら、それも姑息に逃げ道をふさがれ、説得され、ついにプロポーズされ、結婚に至っ

たそうです。

あとでミカさんがスティーブの友人から聞いた話では、「ミカがつれない。あんな女は見たことがない！」と必死だったそうです（笑）

ミカさんはこう言っていました。

「もちろんわたしもスティーブのこと、大好きだったのよ。一切の計算なしに純粋にぶつかってきてくれるスティーブがいとおしかったし、愛されてるなあって幸せだった。会っているときはスティーブだけを見ていたし、彼だって、わたしが彼のことを好きだったのをちゃんとわかってたと思うわ。

ただ、**会っていないときは、わたしの生活における彼の優先順位が低かった**。パリには自腹を切って勉強しに来てたわけだし、やるべきことがいっぱいあったから、**本来の目的を見失わないようにしてたの**。それだけよ。」

その後、ミカさんが二年間の勉強を終えて日本に帰国すると、スティーブも追いかけるようにしてミカさんを訪ねて東京にやってきて、ミカさんのお母さん、お姉さん夫妻、そしてミカさんの娘である愛ちゃんに会って、ミカさんと結婚してもいいか尋ねたそうです。ミカさん 43 歳の秋でした。

翌年ミカさんはスティーブと結婚し、以来、スティーブとゴールドコーストで暮らしています。

ミカさんの一人娘も愛ちゃんも、日本の高校を卒業したら、大学はオーストラリアの大学に入ることを決め、間もなくオーストラリアに引っ越してくる予定です。

～第三話終了～

～ おわりに ～

以上が「追いかけるオンナ 101 のオキテ」ご購入者様限定特典2、「追いかけられたオンナたち」のすべてです。

いかがでしたでしょうか？

この三人のわたしの友人たちは、最初は全員オキテ破りをしてしまって、男性に大切にされなくなったという苦い経験をしています。

ですが、被害者意識にとらわれたり、自己憐憫に浸ることなく、自分自身の考え方を換え、ふるまいを換え、人生そのものに対する態度を変えることで、最終的に女性としての幸せをガッチリつかんでいます。

「追いかけるオンナ 101 のオキテ」本編と照らし合わせながら、彼女たちがどんなオキテを破って痛い思いをしたのか、そしてその後、どんなオキテを駆使することで、彼女たちの男性との関係が激変し、逆転ホームランを打って追いかけるオンナに変身したのか、検証しながら読んでみるのもおもしろいかもしれません。

自分の半生記ともいえる体験談を、わたしのこのテキストに惜しげもなく提供してくれた、三人の愛すべき友人たち、そして彼女たちをこころから慈しみ守ってくれるハズバンドたちに感謝します。

一人でも多くの女性が、追いかけるオンナに変身して、愛し愛される幸せなパートナーシップをつかみますように！！

マリッジカウンセラー このはなさくや